

# 童話 人が馬になる話

山崎みつ子

北の國のお坊さんが、丹波の國の山路を旅してゐました。だんくみ歩いてゐるうちに、谷間たぬみの廣い野原に出ました。

『はて、こんなところにこんな廣い野原はなかつた筈だ。路に迷つたのか知ら。』

み、お坊さんはほんやりあたりを眺めてゐますと、後の方から商人が六人急いで来て、

『もし〜この道を參りましたら、さこへ參るでございませう。』

みお坊さんに尋ねました。

『さあさこへ出るでせう。實は私にもわからないるとろぢや。一體このあたりにこんな野原があつたかな。』

み、お坊さんが獨言のやうに言ひました。

『いや存じませんよ。さうも道に迷つたやうで……』  
み、商人たちは答へました。

『何しろ變なことぢや。氣をつけねばなりませんぞ。ミにかく御一しよに參るこゝにしよう。』

み、お坊さんは商人たちと一しよに野原の道を急いで歩きました。野原はさこまでもどこまでも續いてゐました。

そのうちに日が暮れかゝりました。こんな野原で暗くなつたら大變だみ、一そう急いでゐますみ、やがて谷川があつて、谷川の端に大きな家が一軒見えて來ました。

お坊さんたちはそこに泊めて貰ふこゝにしました。家には髭だらけの親爺み若い男が四五人ゐました。親爺はみんなの前に出て、

『お勞れでしたらう。暫くお休みなさい、そのうちに御

飯を差し上げますから。』

と云つて、枕を七つ出してくれました。六人の商人たちは直に枕をして横になりました。そしてやがてするさ、ぐうぐう騒をかき始めました。

しかしお坊さんだけは家の様子が氣になつて、さうしても眠る氣になれませんでした。でも自分だけ起きてゐて、變に思はれるさいけないと思つて、横になつて眠つたふりをしながら、ささく眼を開けて、そつミ家の中の様子を窺つてゐました。

臺所では爐の上にお釜とお鍋が掛けてありました。そして爐の前に大きな臺があつて、臺の上に鹽の様なものがのせてあつて、その中に土が一杯はいつてゐました。お坊さんは心の中で、

『はてな、お釜は飯で、お鍋は汁だらうが、あの土は何にするたらう』

さ思つてゐました。暫くするさ、親爺が袋の中から何かの種子のやうなものを掴み出して、土の上にふりまきました。さ若い男がすぐに菰をもつて来て、土の上にかぶせま

した。そして皆なで何やら咒文のやうなものを唱へて菰をさりのけますさ、土の上一面に青い草が生えてゐました。若い男はその草をつまんで小さくきざんで、お鍋の中に入れました。お坊さんびつくりしました。

やがて親爺が出て来て、

『御飯が出来ました。さあおあがりなさい。』

さ云つて、お釜から御飯をついで、お鍋からお汁をついでみんなの前に並べました。商人たちはおいしいお汁ださいつて、青い草の入つてゐるお汁をがぶく吸ひました。しかしお坊さんだけは、食べるふりをして、青い草をみんな懐の中におさしてしまひました。

御飯がすむと、また親爺が出て来て、

『さあお風呂にお入りなさい。湯殿が廣う御座いますから、御一しよにお入りなさい。』

さ云ひました。商人たちはよろこんでさやくと湯殿の方に行きました。お坊さんだけは一旦湯殿にはいつてから、そつさぬけ出して便所にかくれてゐました。

みんながお風呂に入るさ、親爺が外から忍びよつて、湯

殿の戸を締めたかと思ふに、いきなりその戸を釘づけにし  
てしまひました。

お坊さんはいよく驚いて、

『ぐづくしてゐると命が危い。』

と、便所の中から飛び出して、庭の後の垣根の蔭に隠れて、  
そつと覗いてゐました。

やがて親爺が、

『うまくいつた。早く持つて来い。』

こ、大きな聲で言ひました。するに若い男たちが、手綱を  
轡うしろを持つて現れました。一人の若い男が釘を抜いて、戸  
を少し開けますと、いきなり馬が一匹湯殿の中から飛び出  
しました。他の若い男がそれを捕へて、轡をはめて手綱を  
つけて、厩の方へ引いて行きました。また少し戸をあけま  
した。こ、また馬が一匹飛び出しました。少しづつ戸をあ  
けるたびに、馬が一匹づつとび出して來ました。六匹だけ  
とび出すに、親爺が、

『さあもう一匹だ』

と云ひました。若い男がすつかり戸を開けてしまひまし

た、しかし馬はきび出ませんでした。みんなは驚いて、  
湯殿の中をのぞきましたが、空虚くうこになつてゐました。みん  
なは大騒ぎをして、

『大變だ。逃げられたぞ。大方あの坊主だらう。早く追  
つかける。』

こ叫びました。お坊さんは、見つかつては大變だと思つ  
て、夢中になつて逃げ出しました。そしてやつと助かりま  
した。

あとで聞くと、あの家は鬼の住家で、人間に青い草を食  
はせて、馬にして町へ引つばつていつては賣うのだといふ  
ことでした。そしてあそこに泊つたもので、無事で歸つて  
來たものは一人もないといふことでした。

お坊さんはこれをきいて、身慄みぞぞをしてこわがりました。

## 雲

大きな白いかたまり雲が

銅像の頭で

ツツと動いてはまたとまる。